

第9回 あらかわ俳壇

投句数	342句
投句者数	69名
兼題	長閑、若葉、梅雨、当季雑詠
選者	佐々木忠利氏(荒川区俳句連盟会長)
期間	平成30年4月1日(日曜)から6月30日(土曜)

特選	薫風や大道芸の綱渡り	松本光章さん
選評	若葉の間を吹き渡る初夏の心地良い風の中、ある程度の高さに綱を張った上でのパフォーマンスに危険の伴う綱渡りは、バランス芸を得意とした見せ場でもある。大道芸は古く室町時代からとも言われている。簡明乍ら句に臨場感がある。	
入選	梅雨長し街灰色に変わりけり	大越源一さん
	太鼓打つ山車引く児らの小さな手	中山千利さん
	聞きもらす夫の言訳梅雨の雷	野村祥子さん
	梅雨寒むや足元すくむスカイツリー	田中和明さん
	荒神輿かつぐ男の片ピアス	渡辺典子さん

第10回 あらかわ俳壇

投句数	503句
投句者数	90名
兼題	蓮、新涼、墓参、当季雑詠
選者	対馬康子氏(現代俳句協会副会長)
期間	平成30年7月1日(日曜)から9月30日(日曜)

特選	風鈴や地球の元素ひびきおり	三田忠彦さん
選評	地球は、宇宙は、何でできているのだろうか。虚空を貫いて色もなく音もない「天籟」の風が吹き渡るように、軒の小さな風鈴が揺れた。現実世界の音とはるか地球の「音なき音」が共振し響き合う瞬間。宇宙との一体感は詩の醍醐味である。	
入選	シネコンの中をはしごや涼新た	小林貞夫さん
	あがらふもなびくもありて破れ蓮	小林春江さん
	象形文字のやうに秋刀魚の骨残す	竹野美恵子さん
	鳥渡る古筆のかなの飾り窓	渡辺長二さん
	日暮里の賑ひを手に墓参かな	望月崇さん

第11回 あらかわ俳壇

投句数	309句
投句者数	57名
兼題	末枯、小春、着ぶくれ、当季雑詠
選者	佐々木忠利氏(荒川区俳句連盟会長)
期間	平成30年10月1日(月曜)から12月31日(月曜)

特選	あてもなくまたも出歩く小春かな	三田忠彦さん
選評	穏やかな春のように暖かな日に誘われ、はっきりとした目的もないまま出歩く。陽気がそうさせるのかまたも出歩く。淡々と生活の一部を寸感に詠まれている。簡明だがゆったりとした人生のゆとりさえ感じさせられる。	
入選	不一致な心と体末枯るる	野村祥子さん
	末枯や地蔵手編みの帽被り	大越源一さん
	木偶笑ふ骨董市の小春かな	小池恵美子さん
	小春日や箆笥の奥にトウシューズ	田中礼子さん
	着ぶくれつねに話の外に母	高安政江さん

第12回 あらかわ俳壇

投句数	285句
投句者数	54名
兼題	歌留多、立春、椿、当季雑詠
選者	対馬康子氏(現代俳句協会副会長)
期間	平成31年1月4日(金曜)から3月31日(日曜)

特選	桃色の百の椿の木のエロス	石川夏山さん
選評	桃色の椿の花といえは八重咲きの乙女椿が思い浮かぶ。名前の通り楚々とした風情で咲くが、それを「エロス」と大胆に詠んだ。椿の木の厚く艶やかな葉質も合わさって、植物を肉体的に捉えた面白さがある。	
入選	ラジオから流れ出る歌春隣	平岡輝松さん
	歌留多とり声諸共に空を切る	竹野美恵子さん
	海棠や自在に咲ける笑ひあり	田中和明さん
	綿ほうしばつと脱ぎたる春日かな	宮内孝子さん
	落椿地球のどこか軋みをり	鈴木しおりさん